

〔資料紹介〕

広島大学蔵本『蒙求和歌』について

黒 木 天谷

はじめに書誌を記す。

写本七卷一冊。袋綴。縦二三・一cm、横一六・八cm。表紙、標布目。題簽「蒙求和歌全」。内題にも「蒙求和歌全」とある。「廣田常善藏書」の朱印あり。墨付、五二丁。書写の行数は本文で約一五行。目録は各巻頭に記す。首題は「蒙求和歌第一／春部廿首」「蒙求和歌第二／夏部十五首」という書き方ではほぼ一定しているが、第四巻で歌数、第六巻で巻数の記載を欠いている。標題は本文よりも大きな字で書写され、標題・本文・歌は同じ高さで揃えて書かれている。本文は片仮名交り文、歌は平仮名交り文になっており、これは七巻を通じて変わらない。本文には高蹊により朱で注が記されている所が何箇所もある。

『蒙求和歌』は源光行の作で、全一四巻。七卷一冊の広島大学蔵

本は上巻のみの残欠本である。池田利夫氏の分類（『蒙求和歌諸伝本考』「鶴見女子大学紀要」第六号）によると、『蒙求和歌』の諸

伝本は三類に分かれ、更に第二類本系統の諸本が三種に分かれる。各系統の特徴は池田氏の論文に詳細に記されているので、今は主要点のみを挙げ広大本の属する系統を明確にしておきたい。

第一類本は二―三段から成るが、目録のみにある章段が更に一九段ある。序文はなく、全巻の目録が冒頭にある。

第二類本は漢文と仮名の序を冒頭に持つ。この系統の第一種本は上下二冊から成り、二五一章段を有し、うち一〇段は和歌のみを欠く。第二種本は上巻七巻までの残欠本。第三種本は標題と歌だけで構成され、説話本文を欠く。

第三類本は二五〇段から成り、うち五段は和歌のみを欠く。冒頭には漢文と和文の序があり、内容的には第二類本に近い。

上巻のみの残欠本という形態的特徴により、広大本は第二類・第二種本の系統に属すると判断できるが、内容について見てもそれは首肯できる。第一種本と第二種本とを上巻に限定して比較すると、第一種本では歌のみを欠く章段が七段あるが、第二種本ではうち巻四の「王霸氷合」一段のみ歌を欠き他の六段すべてに歌がある。広大本でも歌を欠くのは「王霸氷合」のみであり、第二種本の歌の有無に一致する。

次に広大本に特徴的に見られる点について記す。

卷第二・夏部では、全系統にわたり一五項目を目録に掲げる。広大本は「辛毘引裾」の歌のみを欠くが、この項目の歌を欠く伝本はない。更に「漂母進食」「時苗留宿」「常林帯経」の三項目の標題・本文・歌を欠く。この三項が目録にのみある伝本はないが、第一類本が「常林帯経」の歌を欠いている。広大本において「漂母進食」以下三項目を欠くのは単純な書き落しではないかと推測される。と言うのは、欠落部分の直前で丁が移っているからであり、丁交わりに際して三項目を脱したのであろう。

同様の誤りももう一箇所ある。卷第三・秋部には二十項目を収めるが、広大本の目録には終わりの四項、「軻親断機」「桓景登高」「難朱明目」「秦彭攀轅」を欠く。この部分もちょうど十五丁裏が終った所に当り、丁が改まる時に書き落されたものであると考えられる。

最後に広大本の書写経路について述べておく。広大本が第二類・第二種本系統に属することは前述したが、書写者の伴高蹊が上下二冊を書写したにも関わらず下巻を佚したのでないことは、外題・内題ともに「蒙求和歌全」としている所からも明らかであろう。高蹊は元々上巻一冊しかない残欠本を書写したのである。広大本の奥書には、

事之外誤多異本校合侍之而已

弘資卿本ニテ暫時_ニ写之即席とちし
置而可清書也

右一帖風早前黃門借于日野亜相写之畢先黃門借之写畢
有 藤

元禄水上馬春季月

右以氏家伯壽自雄徳山社家所得之本
写之畢且聞書誤所考得以朱添書者也

寛政改元己酉年三月

洛南易侍亭

高蹊_{花押}

とある。この奥書によると「風早前黃門」が「日野亜相」「弘資卿」より借覽して書写した本を、元禄水上馬(壬午、元禄一五年、一七〇二)に「有藤」が書写した。その本を更に「氏家」が「雄徳山社家」から入手し、高蹊が寛政元年(一七八九)三月に書写したので今の広大本である。

日野弘資は元和三年(一六一七)に生まれ貞享四年(一六八七)に薨じている。彼は明暦二年(一六五六)に権大納言に任じているから奥書の「亜相」と合致する。次に「風早前黃門」についてであるが、池田氏の論文で紹介されている国会図書館蔵乙本(第二類・第一種本)の上巻に次のような一本の奥書が記されている。

一本奥書云

弘資卿本ニテ暫時写之了

一本奥書云

蒙求和歌総十有四卷。今闕半。諸雲上家所蔵皆然焉。我師篤所先生。仮風早黃門実種卿本而写之。予叨加朱墨是正而已。

按奥書弘資卿者日野前大納言也。(以下略)

これは持谷掖齋の所持していた第二類・第二種本である「宝永本」の奥書である。これによると「風早黃門」とは「風早実種」であると知られる。『公卿補任』によると、風早(藤原)実種は寛永八年(一六三一)〜宝永七年(一七一〇)の人であり、前述の日野弘資とも生存年が重なる。元禄二年(一六九九)一〇月に権中納言に任じられたが、同じ月のうちに辞している。従って、元禄一五年には「風早前黃門」と呼ばれ得る。

それでは実種より本を借覧した「有藤」は誰か。「公卿補任」によると、寛文二年(一六七二)〜享保一四年(一七二九)の人で、源有藤がいる。彼は権中納言・正二位に至っているから、実種より四十才も年少であるとはいえ、家格からすれば兩人の間に交渉があったとしてもおかしくはあるまい。但し一つ問題となるのが有藤の改名である。彼は有慶又は元雅とも名のり、有藤と改名したのが宝永四年(一七〇七)。即ち元禄一五年(一七〇二)時点では有藤と

いう名を正式名称とはしていない。が、私的な場所で有藤の名を使用し始めるのが何時のことであるかは不明であり、正式改名以前に有藤の名を用いていた可能性もある。それに加え、書写の過程で「有慶」が「有藤」と改められた可能性がないとは言えない。元禄一五年に風早実種から借覧した本を書写した人物が源有藤であったことは首肯されてよいのではないか。

以上のことをまとめると、広大本は次のような書写過程を経ていると言えよう。

日野弘資所持本↓風早実種書写本↓源有藤書写本↓伴高蹊書写本(広大本)

先に記した国会図書館蔵乙本にあった宝永本の奥書によると、掖齋が所持していた宝永本(今は伝わらない)は日野弘資所持本を風早実種が書写したものを掖齋が書写した本であるという。とすると掖齋所持の宝永本と広大本とは元々同じ本を書写したものと云うことができる。有藤が実種本を書写した元禄は宝永の前の年号であり、両本の書写時期は極めて近いと思われる。

—活水女子短期大学助教授—